



**大須賀 穰 教授**  
Yutaka Osuga

**研究分野：**産婦人科学・生殖医学・内視鏡手術学

**研究内容：**ヒトの生殖現象に関連する各種疾患の原因究明と治療法の開発を行っている。特に、臨床と基礎研究の橋渡し、および、外科的・内科的治療ならびに生殖補助医療を駆使した集学的治療の開発に取り組んでいる。次世代への影響を考慮しつつ、妊孕性向上を含めた女性の一生のQOL（生活の質）を改善したい。

昭和60年～ 東京大学医学部産科婦人科学教室、国立総合病院、稲田登戸病院、社会保険中央総合病院、東京立病院で臨床に従事  
平成7年～9年 米国スタンフォード大学産婦人科に留学

平成16年  
平成23年  
平成25年

東京大学医学部附属病院女性診療科・産科 講師  
東京大学大学院医学系研究科 産婦人科学講座 准教授  
同上 教授

## 子宮内膜症～月経現象の功罪と謎の疾患～

### 子宮内膜症とは

子宮内膜症は子宮内膜類似の組織が子宮とは別の部位にできる疾患である。発生部位は主として卵巣、骨盤腹膜など骨盤内であるが、臍、肺など全身のどこにでも発生しうる奇妙な疾患である。生殖年齢に発症し、患者数は全国で100万人以上といわれる頻度の高い疾患である。症状は、重度の月経痛をはじめとする激しい疼痛、難治性の不妊症などが代表的である。病理学的には良性であるが、悪性化しやすく卵巣がんのリスクも高める。このように女性の一生の生活の質を著しく障害する重要な疾患であるにもかかわらず、その病因・病態は謎に包まれており根本的な治療法がないのが現状である。

### 子宮内膜症と月経の関係

本疾患は発症に月経が重要である。月経現象は生物学的には独特の現象でヒトを含めた霊長類のみに認められる。子宮内膜症は月経現象を有するこれらの種においてのみ認められ、月経現象のない一般の動物では子宮内膜症は発生しない。子宮内膜症の病巣は月経時に剥奪した子宮内膜の一部が月経血とともに卵管を通り腹腔内に流入して腹膜に着床し、それが増殖して成立すると考えられている。胎児に対する子宮内環境を良好にするための進化の結果として高等生物に月経現象が生じたと考えられるが、子宮内膜症の発生から見ると月経が逆に仇となっているといえる。しかし、月経血の腹腔内への逆流はほとんどの女性に認められるにもかかわらず、子宮内膜症が発生する女性はその一部である。すなわち、月経は疾患発症の必要条件であるが、何が十分条件であるかはまだ不明である。

### 子宮内膜症の病因をめぐって

これまでの研究により子宮内膜症の発症には炎症、免疫、内分泌、遺伝、環境など多くの要因が関係すると言われている。私どもは手術で得られた標本などを中心に解析を行い、複数の因子が互いに連携しあうことにより子宮内膜症の進展のための局所環境を形成していることを見出してきた。たとえば、病巣局所において、炎症反応、免疫異常、内分泌異常のいずれも子宮内膜症を進展させるが、炎症反応と免疫異常が局所において協調して内分泌異常を惹起し、病巣の進展に拍車をかけることもわかってきた。一方、子宮内膜症の細胞自身にも病気の進展に関係する種々の異常がみられることもわかってきている。組織学的には類似して見える子宮内膜細胞と子宮内膜症細胞では、遺伝子そのものの変異は少ないが、遺伝子発現には様々な変化が見られる。これらの変化は子宮内膜症細胞が生体から排除されることなく局所環境の影響下に増殖するのに有利に働いていると解釈できる。子宮内膜症の治療は薬物療法、手術療法、生殖補助医療のコンビネーションによりなされているが、研究で得られた成果を新たな子宮内膜症の治療戦略に導入したいと考えている。

図1 子宮内膜症と女性の一生に与える障害



図2 子宮内膜症の発症に関連する因子

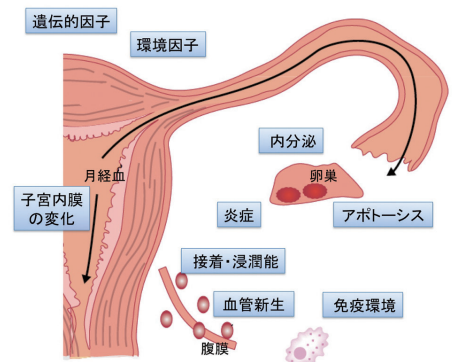


図3 基礎研究と技術開発の進歩に支えられた新規治療法の開発

